

# 国 語

( 1 期 )

# 国語 (1期)

## 第1問

次の文章(文章A・B)は、西林克彦著『知ってるつもり 「問題発見力」を高める「知識システム」の作り方』からの抜粋(文章Aは第1章、文章Bは第3章のそれぞれ一部分)である。これらの文章を読んで、後の問いに答えよ。

### 〔文章A〕

知識が少なく孤立していると「知ってるつもり」になりやすく、知識が孤立しないで豊富にあるようだと「知ってるつもり」になりにくいというのは、奇妙に聞こえるかもしれませんが、次のように考えれば整理できるのではないかと思います。

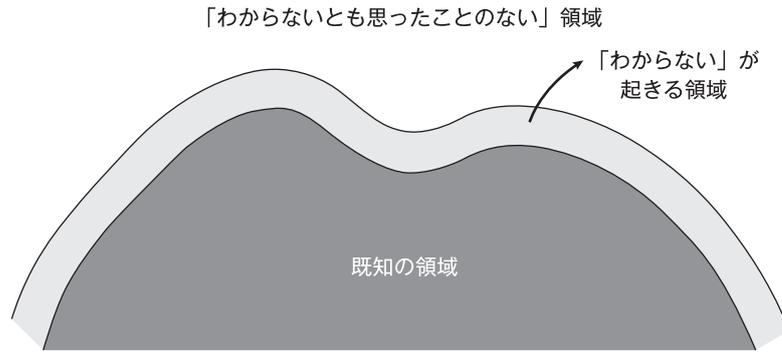
いま、日本の47都道府県名と県庁所在地を憶えなければならぬとします。10セット憶えれば残りは37ですし、40セット憶えれば残りは7です。憶えれば憶えるほど残りは少なくなっていきます。このような知識を対象にしていれば、知ってれば知ってるほど知らないことは減っていきますし、最後には知らないことがなくなります。

こういう場合には、知ってることが少なければ、知らないことは多いことになります。知ってることが多ければ、知らないことは少なくなります。しかし、こういう関係が成立するのは、対象にしている知識が **甲** だからです。試験範囲なんていうのも似たようなものでしょう。

ところが、われわれが通常相手にしているのはこういう範囲の決められた暗記のようなものではありません。 **I**、同じ各都道府県に関することでも、気候や産物といった実際的な細かい領域に入っていけば、事態はまったく違ってきます。

リンゴの産地の1、2、3位は青森県、長野県、岩手県ですが、なぜ青森・岩手から離れた長野が2位なのか、青森のリンゴの産地は、岩手県のある太平洋岸ではなく、なぜ弘前を中心にした日本海側に集中しているのか、低温が重要なら西洋リンゴが最初

図1 「既知」と「わからない」と「わからないとも思ったことのない」の関係



に<sup>a</sup>ドゥニユウされた北海道はなぜ生産量が多くないのか、などなどわからないこと知らないことがいくらでも出てきます。

こういう場合には、<sup>A</sup>知れば知るほどわからないことが起こりやすくなるのです。その理由は簡単です。獲得した知識、知って

る知識を使って、その周辺にスポットライトを当てるからです。そういうことであれば、そして知識の使用の仕方がそのようであれば、知識が多いほどわからないことは起こりやすく、わからないことは増えることになります。「知らない」とか「わからない」といった事態は、所有している「知ってる」知識のすぐそばで起きるのです。「知ってる」知識を活用して「知らない」状態や「わからない」状態になれるわけです。

そして、その外側には、「考えたことのない、わからないとも思ったことのない」世界が広がっているのです。模式図的に表せば図1のようになろうかと思えます。

「考えたことのない、わからないとも思ったことのない」領域を、「知らない」領域に含め、しかも知識世界全体を有限のものと思えば、「知れば知るほど知らないことが減る」という考えになります。しかし、知った知識を使ってわからなくなるといのが現実ですから、図1を受け入れて、知れば知るほど知らないことが増えると思えるのが妥当ではなからうかと思えます。

Ⅱ、知識が孤立すると疑問を持たないので「知ってるつもり」になりやすいのだと思って下

## 〔文章B〕

ここで、<sup>B</sup> 孤立した知識はなぜマズイのかについて述べておきます。

それを述べるために、システム化された知識形態についての話から始めましょう。システム化されたと言っても、完成形があるわけではありません。どの程度になったらシステムと言えるのかは困難です。ここで用いているシステム化の語は、孤立した知識に対してで、程度問題と考えて下さい。孤立しているか、それとも近くの知識と結びついてある程度システムをなしているかどうかの 乙 な問題だと考えて下さい。

さて、(注)「維管束がある植物系統は？」とか「海藻に花が咲くか？」といった質問をされても、孤立した知識では答えられなかった可能性がありますが、多少なりともシステム化した知識形態のもとであれば、そこその自信を持って答えられるだろうと思います。ですから、知識がシステム化することによって、知識を 丙 に組み合わせることができることや答えられることが増えるということになります。これはすこぶる当たり前のことです。

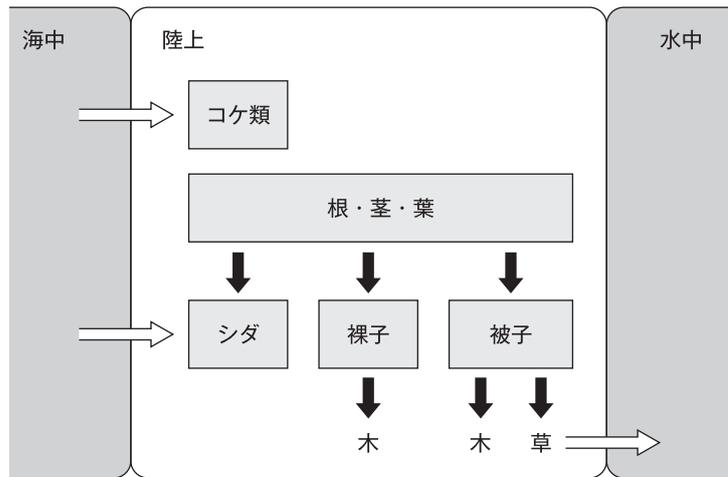
それと、これは最初聞くと変に思われるかもしれませんが、知識がシステム化することによって、わからないことや疑問に思うことは増加するのです。

われわれが「わからない」とか「疑問」といった言葉を使う時に、次の3種のものが区別できるように思います。

ひとつめは、「矛盾」です。ある知識と別の知識が衝突していると矛盾が生じます。実際によく起こる矛盾は、次のようなものです。システムの中の複数の知識を組み合わせてある考えや予測を作ったとします。それがシステムの中の他の知識に合わない、合わないように見えるという場合です。知識システムでは知識の操作がしやすくなりますから、孤立した知識に較<sup>くら</sup>べてこの矛盾状態が起こりやすくなります。

2つめは、「隙間」です。ある説明を考えて下さい。説明はいくつかの事項の連なりでできています。遅刻の説明として「昨夜コーヒを飲んだら寝付けなくて……」というのがあったとして下さい。コーヒに覚醒作用があると知らない人にとっては、この部

図2 陸上の植物



分は隙間があつて了解できないはずで、隙間を埋めようと「カフェインが含まれていて……カフェインの作用は……」と説明しても、隙間はどうしても残ります。説明は必ず隙間があつて飛んでいるのですが、その隙間を聞き手の既存知識が埋めているのです。手持ちの知識で隙間をうまく埋められないと、説明やものごとの関係は了解できないのです。

知識システムは複数の知識が絡んだものですから、それだけ知識間を結ぶ関係が増えます。すなわち、手持ちの知識を駆使して埋めなければならない「隙間」の数が増えるのです。これが知識がシステム化にしたがつて隙間によってわからない状態が起きやすくなる理由です。

3つめは、「探索」に関わるものです。図2を見て下さい。被子植物が再度水中に進出しているのですが、そういう冒険をしたのは、被子植物の草だけなのでしょう。裸子植物の「木」にそういうものはないのでしょうか。シダではどうなのでしょう。それ

らが <sup>c</sup>カイクではなくても、  
Ⅲ その冒険をこころみた被子植物の「草」が圧倒的に多数であったとしたら、何かの理由があるのでしょうか。【1】

このような疑問は、前の2つの「わからない」とは微妙に異なります。前の2つは、眼前に論理の「矛盾」や「隙間」が存在して「わからない」状態がすでに起きているのですが、「探索」はそうではありません。どうなっているか気になるから調べてみよう、「探索」にかかってみようと、行動を誘発する「わからない」状態です。そして、知識がシステム化されてくれば、それだけ探索してみたくなり、気になる箇所が増えるのは当然だと言えるでしょう。【2】

これらの理由によって知識システムでは、わからないという事態が頻繁に起きる可能性があります。【3】

システムが「セイチ<sup>d</sup>」になればなるほど、わからないことも増えてきます。きりはありません。ただ一般的に、興味や関心は移っていきますので、こういう問題点やわからない点は残っているけど、この知識システムはこの状態で置いておこうということになっているのが普通だと思います。【4】

さて、孤立した知識ではこの知識システムとは逆の状態になるわけです。単体の知識ですから、他の知識との矛盾・隙間によってわからない状態に陥ることはまずありません。【5】

さて、孤立した知識がわからない状態になりにくいということは、その知識を所持している人間がその知識に関わる問題を考えなくて済む確率が高いということです。それは他者から見れば、知識の状態は必ずしも満足できるものではないにもかかわらず、本人としては知っているという感覚を持っている可能性も高くなります。

受験生が、数学の参考書のある章の解説を読み、例題や章末の問題を解いて、その領域をマスターしたと思えば、かなり安易な姿勢です。実際の試験では、どの領域の問題か一見してわからないものはいくらもあります。問題が参考書のどの章にあるのが、すでにヒントになっているのですから、慎重な受験生は、ヒントがなくても自分は解けるだろうか、自分をわざとノーヒントの危険な状況に置いたりします。これなども、わからない状態が学習を進めるといふ例です。

Ⅳ、<sup>ア</sup>老練な教師は知ってるつもりになっている子どもたちに、「ゆさぶり」をかけて、わざと「わからない状態」にするのがよくあります。足し算や引き算の筆算を「なぜ下の位からやるのか」とか、ミカン7個とリンゴ5個の差を7-5と簡単に引き算する子どもに、「引き算は取るということでしたね。ミカンからリンゴは取れるのですか」などとゆさぶるのです。

わからなくさせられた子どもたちが、納得のいくように知識システムを整備できればわかり方は格段に進展します。うまくすれば「僕知ってる」といった勉強に対する安易な姿勢も影を潜めるようになります。「知に対して謙虚」になる感じもあります。子どもたちが自力で「わからなくなれない」のであれば、教師がその代理をするというのが、「ゆさぶり」といふ教育行為なのかなと思います。

このように、わからなくなれるというのは、私たちの知識システムの進展に関して欠くべからざるものです。わからない状態と  
いうのは、知っていることを用いて、知らないことを見いだしたり、矛盾を見つけってしまった状態です。 V、イピンポイント  
のわからない状態というのは私たちの既知のすぐそばにしかないのです。既知と未知とが接している境界で初めてわからない状態  
が起きるのです。その外側には、私たちがわからないとか、知らないとかと思ったことがない世界が広がっているのです。

わからないとか知らないと思える場所は既知のすぐ外側です。しかし、この既知のそばであれば、そこでわからないとか知らな  
いと自動的に思えるかというとはそうではありません。<sup>c</sup> 既知の知識を駆使してわからない状態、知らないと思える状態を積極的に  
作らなければならないのです。孤立した知識はシステムを成していないので、わからない状態や知らない状態を作れるほどに知識  
を駆使するのは非常に困難です。一般的には無理です。

知識の少ない人、丙に知識が繋が<sup>つな</sup>っていない人は、疑問が少ないのです。

一方、知識が多量にありしかもそれらが 丙に組織されている人は、他者から見ればものをよく知っていると思われるかも  
しれませんが、すぐ疑問にぶち当たることが可能ですから本人は疑問や知らないことを多く抱えており、とてもものをよく知って  
いるとは思っていないかもしれません。

(注)「維管束がある植物系統は？」とか「海藻に花が咲くか？」といった質問——本文よりも前の部分でなされた質問である。

問一 線部 a ～ e について、カタカナは——部と同じ漢字であるものを、漢字は読みがなを、各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号

1

～

5

a ドウニユウ

1

- ① ドウに入った演技
- ② 心理を鋭くドウサツする
- ③ 見学者をユウドウする
- ④ ドウワを読み聞かせる
- ⑤ ビドウだにしない

b 絡んだ

2

- ① なじ
- ② から
- ③ ふくら
- ④ よど
- ⑤ ひる

c カイム

3

- ① キカイな行動をとる
- ② 紛争にカイニユウする
- ③ 待遇をカイゼンする
- ④ 免許カイデンの腕前
- ⑤ 徹夜でケイカイに当たる

d セイチ

4

- ① チミツな計画を練る
- ② 美のキョクチに達する
- ③ 適切なシヨチを施す
- ④ チセツな字を書く
- ⑤ 傷がチユする

e 潜める

5

- ① まと
- ② かが
- ③ みと
- ④ とど
- ⑤ ひそ

問二 〜〜線部ア・イの本文中における意味として最も適切なものを、各群の①〜⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号 6・7 (ア: 6、イ: 7)

ア 老練な

- 6
- 
- ① 年齢を重ねて、融通が利かなくなった
  - ② 人の気持ちを的確に読み取る力がある
  - ③ 多くの経験を積み、慣れて巧みである
  - ④ 性格がよく、謙虚で思い上がらない
  - ⑤ 長年、自分を厳しく鍛え上げている

イ ピンポイント

- 7
- 
- ① なんとなくとらえられた範囲
  - ② 限られた狭い範囲
  - ③ 意図的に決められた範囲
  - ④ 強制的に閉じられた範囲
  - ⑤ 明確で見やすい範囲

問三 空欄 甲 を補うのに最も適切な言葉を、次の①〜⑤から一つ選べ。

解答番号 8

- ① 論理的に考えられたもの
- ② 理想的に集められたもの
- ③ 即興的に決められたもの
- ④ 歴史的に伝えられたもの
- ⑤ 人為的に限られたもの

問四 空欄 I、V を補うのに最も適切な言葉を、次の①〜⑧からそれぞれ一つずつ選べ。(同じものを繰り返し用い

てはならない)

解答番号 9、13 (I: 9、II: 10、III: 11、IV: 12、V: 13)

- ① ですから
- ② また
- ③ なぜなら
- ④ たとえば
- ⑤ もし
- ⑥ まして
- ⑦ まるで
- ⑧ 逆に

問五 空欄 **乙**・**丙** を補うのに最も適切な言葉を、次の①～⑥からそれぞれ一つずつ選べ。(同じものを繰り返し用いてはならない)

解答番号 **14**・**15** (乙：**14**、丙：**15**)

- ① 相対的      ② 規範的      ③ 有機的      ④ 合理的      ⑤ 観念的      ⑥ 画期的

問六 「文章A」中の傍線部A「知れば知るほどわからないことが起こりやすくなる」のはなぜか。図1や「文章B」の内容も踏まえて、最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。

解答番号 **16**

- ① 知識が増えれば増えるほど、「知ってる」知識を有効に活用することができず、「知らない」状態や「わからない」状態になってしまうから。
- ② いくら知識を獲得し、「知ってる」知識を増やしたとしても、知識全体の限られた部分にスポットライトを当てることができただけであるから。
- ③ 知識をシステム化することで、そのシステムの中に組み込むことができない知識や組み込まれることを拒む知識が出てくることは避けられないから。
- ④ 知識をうまく組み合わせることができず、バラバラに孤立した知識を生みだしてしまい、それがわからないという状態につながってしまうから。
- ⑤ 複数の知識が密接に結びついてくると、その中でつじつまが合わなくなったり、つながりがつかなくなったり、新たな疑問がわいてきたりするから。

問七 「文章B」中の傍線部B「孤立した知識はなぜズイのか」に対して、筆者はどのように考えているか。最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。

の①～⑤から一つ選べ。

解答番号

17

- ① 孤立した知識は、システム化された知識状態の中に組み込まれておらず、物事を理解することができなくなってしまうから。
- ② 孤立した知識は、本人だけが知っているという自己満足の状態に陥らせ、知識システムを進展させることができないから。
- ③ 孤立した知識は、矛盾した状態を生みだしやすく、また、隙間もできてしまい、「わからない」状態を引き起こしてしまうから。
- ④ 孤立した知識は、何も知らないのと同じであり、既知の知識を用いて、知らないことを見出<sup>みいだ</sup>していくことができないから。
- ⑤ 孤立した知識は、「わからない」状態を頻繁に起こし、勉強する意欲をそいでしまい、成績を伸ばすことができないから。

問八 「文章B」中の傍線部C「既知の知識を駆使してわからない状態、知らないと思える状態を積極的に作らなければならない」とは、どういうことか。図1や「文章A」の内容も踏まえて、最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。

解答番号

18

- ① 範囲の決められた、憶えていけばよいだけの知識は、知れば知るほど知らないことが減るのだから、知らないことが最終的にはなくならなければならないということ。
- ② 「知らない」状態や「わからない」状態の外側には、「考えたことのない、わからないとも思ったことのない」世界が広がっていないなければならないということ。
- ③ 獲得した知識、知っている知識を使って、知っている知識の周辺にスポットライトを当て、「わからない」という事態を起さなければならないということ。
- ④ 知識が孤立すればするほど、全体像を把握することが難しくなり、ますますわからなくなってしまうので、知識を孤立させなければならないということ。
- ⑤ 学校の試験とは異なり、日常生活においては細かい領域のことまで知っておく必要があるので、知識をどんどん増やしていかなければならないということ。

問九 次の文は、もともと「文章B」の中に記されていたものである。この文が入るべき最も適切な箇所を後の①～⑤から一つ選べ。

解答番号

19

というわけで孤立した知識は、わからない状態をベースにした思考を迫られることが少ないのです。

- ① [1]
- ② [2]
- ③ [3]
- ④ [4]
- ⑤ [5]

問十 「文章A」・「文章B」を読んだ後に、生徒が話し合っている場面である。「文章A」・「文章B」の内容に合致しないものを、次の①～⑥から二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号

20

21

- ① 生徒A——私は図1に「既知」の領域のすぐ外側に「わからない」が起きる領域が描かれているのを見て奇妙だなあと最初は思ったんだ。でも、文章を最後まで読んだら、納得できたよ。
- ② 生徒B——私も「知れば知るほどわからないことが起こりやすくなる」というような逆説的表現に出会って少し面食らっちゃった。でも、文章を読んで、わからない状態になることの重要性が理解できたわ。
- ③ 生徒C——そうなのかな。わからない状態はやはり起こらない方がよいように思うけど。図2のように模式図的にすれば、「わからない」状態を解消することができると思うよ。
- ④ 生徒D——図2は、「わからない」状態を解消するために描かれているわけじゃなくて、知識が増えればわからないことを探りたくなるということを知ったわ。知識が増えれば増えるものじゃないかしら。
- ⑤ 生徒E——私もそう思うわ。知識が増えれば増えるほど、「わからない」状態におのずとなるものよ。だから、とにかく一生懸命に勉強して知識をどんどん増やしていかなきゃ。
- ⑥ 生徒F——いずれにしても、孤立したままの状態の知識ではだめで、知識をシステム化することが大切になってくると思うことね。と言っても絶対的なシステムという状態は存在しないと思うけれど。

## 第2問

次の問いに答えよ。

問一 次のA～Eの作品の作者を、後の①～⑧からそれぞれ一つずつ選べ。

A	斜陽	解答番号	<input type="text" value="22"/>
B	黒い雨	解答番号	<input type="text" value="23"/>
C	蜘蛛 <small>くも</small> の糸	解答番号	<input type="text" value="24"/>
D	和解	解答番号	<input type="text" value="25"/>
E	草枕	解答番号	<input type="text" value="26"/>
①	夏目漱石	②	森鷗外
③	志賀直哉	④	島崎藤村
⑤	太宰治	⑥	永井荷風
⑦	芥川龍之介	⑧	井伏鱒二

問二 次のA～Eの語句の意味を、後の①～⑧からそれぞれ一つずつ選べ。

A	泰然自若	解答番号	27
B	明鏡止水	解答番号	28
C	傍若無人	解答番号	29
D	濡れ手で粟 <small>ぬれあわ</small>	解答番号	30
E	口が減らない	解答番号	31

- ① 何の苦勞もしないで、利益を得ること
- ② 清く正しく、後ろ暗いところがないこと
- ③ 何の邪念もなく、静かに澄んだ心の状態のこと
- ④ 無用な発言をして、災いをまねくこと
- ⑤ 思うようにならなくて、もどかしいこと
- ⑥ 反論や負け惜しみを次から次へと言うこと
- ⑦ 人前をはばかり、気ままに振る舞うこと
- ⑧ ゆったり落ち着いて平常と変わらないこと

〔以下余白〕